山梨の旧道を訪ねて

四方を山に囲まれた甲斐の国と駿河の海を最短で結んだ中道往還、多くの旅人や商人で賑わった右左口宿は、今、人々の生活の中で静かに時を

一道一会

甲府市／中道往還（右左口宿）

その昔、甲斐の国と駿河の国を最短距離で結んでいた右左口路は、東の御坂路、西の河内路の中間を通っていたことから中道往還と呼ばれていた道である。駿河湾でとれた魚はこの道をたどり翌朝には甲府に運ばれ、生魚として食されていたそうである。今回はその中道往還を笛吹川に架かる中道橋から右左口宿まで歩いてみた。

県道甲府・精進湖線の中道橋を起点に最近整備された真新しい道をゆっくりと道なりに進んで行くと、数分で新道に交わる。傍らに立てられた「浜」と書かれた標識が、その昔この地域が渡し船の船着き場や河岸であったことを微かに伝えている。

新道を少し歩くと旧道は芋沢川に沿って左折し、最初の橋で川を越えていく。住宅の間を縫うように歩き、道祖神や六地蔵が祀られている一里塚公民館を通り過ぎ中央自動車道の高架下に出る。中道橋からここまではゆっくり歩いても二十分程度の道のりであった。

高架下には「右　右左口・精進」「左　堀ノ内・寺尾」と書かれた道標が置かれている。その道標を右手にみて直進し、右折したところに「上曽根の一里塚」がある。甲府空襲で傷ついたとされる大木と根元に置かれた石祠が往還の証のようにたたずんでいる。一里塚を過ぎると旧道は新道に合流する。ここから県立考古博物館東の交差点までは新道を十分程度歩くことになる。

一里塚公民館の六地蔵

県立考古博物館東の交差点を左折し五分余り歩くと、間門（まかど）の信号機があり旧道は右手を上っていく。車の騒音から離れて雑木林と畑の続く山道はどこか懐かしさを感じさせてくれる。約一キロメートル程で旧道は再び新道に合流する。旧道はここから右と左の二手に分かれるが、今回は右手の道、上向山地区を経て右左口宿に至る道を歩くことにした。

合流地点にある庚申塔（こうしんとう）を左にみて坂道を下ると上向山の集落に入って行く。住宅の軒下を潜るように歩いて行き、北庚申橋を渡った左手に丸石を祀った道祖神があり、脇の塚には石祠、石灯ろう、金剛像に三猿と二鳥を配した庚申塔が祀られていた。さらに足を進めると道は右に大きく曲がりながら丘を越えそれを下りきったところで中道南小学校に出る。

小学校を左折し、しばらく歩くと下宿の交差点に着く。信号の脇には「厄除け地蔵」が鎮座し、「右　大津宮原観音」「左　市川文珠御崎」と刻まれた道標も置かれている。交差点をさらに直進し坂道を上ると、右左口宿に入って行く。

右左口宿の道祖神　常夜灯と道標

下宿の交差点から数分歩くと左手からもう一つの旧道が交わる。その脇には道祖神や常夜灯そして道標が置かれ、この道の歴史を伝えているようでもある。ここからまっすぐに上って行く右左口宿は、武田勝頼を滅ぼした織田信長の往来のため、徳川家康によって道や家並みが整備され、宿泊のための仮御殿までも造られたとされる。信長はこの仮御殿に一泊してから三カ月後、本能寺にて明智光秀に討たれることになる。その後、家康は甲斐の国に攻め入った北条氏を破り再び右左口峠を越え甲府盆地に入り、信長のために造られた右左口宿の仮御殿に宿をとったとされる。歩けば十五分程で通り抜ける右左口宿ではあるが、時には軍用道路として、また時には生活と文化を運ぶ道路として四百年以上の時を刻んできた。道沿いには、徳川家康により整備された間口が四間二尺（約七・七メートル）の家並みが残り、往時の面影を微かに伝えているように思える。家並みが途切れ、瓦に徳川家の家紋である「葵」が刻まれた宝蔵倉のある敬泉寺を過ぎ数分歩くと、放浪の歌人「山崎方代」の生家跡があり、置かれた歌碑には「ふるさとの右左口郷（むら）は骨壺の底にゆられて吾が帰る村」と刻まれていた。

右左口宿に残る徳川家康御殿場跡

宿を抜け、広くなった道を数分歩くと、左手に曲がる道と直進していく細い道に分かれる。直進する細い道が右左口峠に向かう旧道である。残念ながら旧道はここからわずか先で通行不能となっていた。人々の往来が途絶えた峠越えの道は、新たな道にその役割を託し、今静かな眠りに入ろうとしている。

敬泉寺入口に建つ、宝蔵倉の瓦に刻まれた「葵」の紋